『夢十夜』「第三夜」論

――鎌倉光明寺「お十夜」との関連について――

中村桂子

【抄録】

夏目漱石『夢十夜』は、『朝日新聞』掲載から、今年、一一〇年を迎えた。

十の夢を書き綴った小説は、世界でも類がないと言える。漱石は、何故、『夢十夜』という題名を付けたのだろうか？　『夢十夜』という題名について、新たな視点からの解釈を試みる。

「お十夜」とは、『無量寿経』の教えに基づいて、誦経し念仏を修する法要であるとされる。『夢十夜』「第三夜」には、〈仏教〉と通底しているのではないかと思われる箇所が、そこ、ここに見られる。『無量寿経』からの、『夢十夜』「第三夜」へのアプローチにより、本稿では、『無量寿経』と、「小僧」の有する能力との関連において新たな解釈（宿命智・天眼智・天耳智・他心智＝「神通」）も試みる。

キーワード：光明寺、「お十夜」、『無量寿経』、〈仏教〉、俳句

一、「第三夜」における先行論

夏目漱石『夢十夜』は、一九〇八［明治四一］年七月二五日、『朝日新聞』に掲載された。

『夢十夜』「第三夜」を研究史として概観してみると、伊藤整氏は、『現代日本小説大系』第十六巻解説（一九四九年）で、

現實のすぐ隣にある夢や幻想の與へる恐ろしさ、一種の人間存在の原罪的な不安がとらへられてゐる。(1)

と読み解き、この、伊藤整氏の解説が、『夢十夜』研究の原点ともなっている（傍線引用者、以下同じ）。

その四年後、荒正人氏は、「漱石の暗い部分」（一九五三年）で、

――この「第三夜」の奇怪な夢の話も、傳説の味ひなどもまぜて小さくまとめた「父親殺し」と見做していいのではないか。(2)

と、「父親殺し」について提起している。

右記の、伊藤整氏と荒正人氏の、『夢十夜』の先行研究は、最早、

不動の位置を占めていると言っても過言ではない。

「『夢十夜』試論―第三夜の背景―」（一九七六年）で、相原和邦氏は、

けれども第三夜の場合は、たとえば、見えるはずのない小僧に『石が立つてる筈だがな』と指摘された後実際に石が見出され、『丁度其の杉の根の処だ』という指摘の後杉が描き出されている、という風に、予言的なことばの方が事実に先行している。(3)

と、「小僧」による予知について論じている。

漱石は「第一夜は今日大阪へ送り候。短かきものに候。」と、高浜虚子宛書簡にしたためている。「第一夜」同様、「第三夜」も短編であるため、様々な解釈が可能である。

笹淵友一氏は、「『夢十夜』論―第二夜・第三夜―」（一九八三年）で、

第三夜の作品としての興味は、「自分」が百年前に盲目を殺したという記憶が子供との会話を通じて――実際は子供にとりついている盲目の怨霊が子供に言わせている。――徐々に自分の意識に蘇ってくることにある。(4)

と、「盲目の怨霊が子供に言わせている」と捉えている。

『漱石とその時代（第四部）』（一九九六年）で、江藤淳氏は、

「小僧」は、いうまでもなく、「百年」の起点の形象化されたものである。それは「自分の過去、現在、未来を悉く照」して、「夢」を意味付け、「自分」の罪を露顕させる。(5)

と、「小僧」とは何者かについて、端的に述べている。

以上、「第三夜」の先行研究を年代順に辿った。まさに、百花繚乱の感さえあるが、〈仏教〉という視点で、本作品（『夢十夜』）を論じた先行研究はあまり無いという点を、ここで確認しておきたい。

二、『夢十夜』と「お十夜」と

大本山光明寺発行の、「お十夜」（平成二七年一〇月）に拠ると、

『無量寿経』「ここにおいて善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の国土において善をなすこと千歳するに勝れたり。（略）」

明応四（一四九五）年、大本山光明寺第九世観誉祐宗上人は、後土御門天皇の勅召によって上洛し、宮中の清涼殿においてお念仏の教えを御進講されました。祐宗上人の該博な知識と篤い信仰に感銘された後土御門天皇は、自ら筆を執られた御宸翰の『阿弥陀経』を祐宗上人に、関東総本山の称号を光明寺に下賜され、光明寺を国民の平安を祈る勅願寺に定められました。さらに上人は、京都東山真如堂において、冒頭の『無量寿経』の一節を拠り所として、毎年、十日十夜にわたって勤められていた十夜法要を真如堂の式衆と共に紫宸殿において厳修し、光明寺での十夜法要の奉修に勅許を得ました。以来、全国の浄土宗寺院でお十夜が勤められるようになったことから、祐宗上人を十夜始祖と讃えています。

とされている。

さて、ここで、「お十夜」の内容について触れておきたい。『浄土宗大本山　天照山蓮華院　光明寺』に拠ると、

「引声法要」と呼ばれる独特の曲調をつけたお経が称えられ、鉦講といわれる信徒による太鼓・雲盤・鈴を打ち鳴らす勇壮且つ優美な音色は人々の心を幽玄の世界に誘います。

とされる。

ところで、漱石に則して、時間の流れを整理してみたい。『増補改訂　漱石研究年表』[6]に拠ると、左記は「明治三〇年」のことである。

漱石は七月四日に妻を伴って上京。九月七日まで東京に滞在した。[7]

八月初旬から約一ヵ月、妻の実家である中根家の人たちと静養のために鎌倉材木座の大木遠吉伯爵の別荘で過ごした。[8]

「半月や　松の間より　光妙寺」の句は明治三〇年八月二二日の句会稿にもみえる。[9]

明治四〇年三月三〇日（土）の『日記』に拠ると、二回目の京都への旅行で、漱石は真如堂を訪れている。真如堂は、京都市左京区にある寺院。十夜法要で知られる。

○真如堂

塔。本堂。山門ヨリ石甃ヲ望むに斜めに上る。左右楓樹のみ。石甃は不規則なる御影を乱れがたに、かためて姿致多し

○夕陽は吉田山の上より来る

『夢十夜』が、『朝日新聞』（一九〇八［明治四一］年七月二五日～）に掲載される。

写真１　国際詩人として活躍した野口米次郎（1875～1947）が英文詩集のなかで紹介した明治期の光明寺のお十夜のにぎわい

明治四五年の『日記』に拠ると、

六月二九日、三〇日、七月一日

（略）

○光明寺境内（材木座）に開祖記主禅師手植の白檀あり見事な木なり

約一ヶ月後の大正元年の、『日記』に拠ると、

八月四日

（略）

光明寺の裏の松山の松が軒を圧して見える。

と、したためられている。

漱石の日記の文中の、「開祖記主禅師（きしゅぜんじ）」とは、

西暦一二四三年創建といわれ、執権北条経時公の帰依を受けた浄土宗第三祖然阿良忠上人開山のお寺です。(10)

とされる。

なお、光明寺からは、二〇一八［平成三〇］年一〇月一三日、次のような、ご回答をいただいた。

「漱石は、「お十夜」のことを知っていたとは思う。当時（明治三〇年頃）、鎌倉に来る人は、「お十夜」のことを知っていたと思う。当時、こんなに住宅も建ってなかったし。（ただし、光明寺には、漱石についての記録は残っていない。）漱石の日記に書かれている、白檀の木は今も残っている。漱石の日記に書かれている、松の木は切られて今は無い。」

『夢十夜』の題名が、『無量寿経』の、「十日十夜」や「十夜法要」からヒントを得ているのであれば、『夢十夜』という作品自体、〈仏教〉と密接な関係があると言えよう。

『夢十夜』「第二夜」は、侍が和尚に〈趙州曰く無と〉の公案を与えられるが、悟れずに苦悩の極に追い込まれるという作品である。〈仏教〉との関連が見て取れる。

『夢十夜』「第六夜」は、護国寺の山門が舞台の作品である。運慶は鎌倉初期の仏師である。明治になって日本の伝統は廃れてしまった。近代化を急ぎ過ぎた日本への、警鐘と取るべきなのだろう。仏教的色あいが濃い作品であると言える。

三、『無量寿経』と『夢十夜』

ここで、『夢十夜』という作品への、『無量寿経』からのアプローチを試みる。『無量寿経』には、神通・宿命・天眼・天耳・他心智について、書かれている箇所が存在する。

左記は、『浄土三部経（上）』(11)からの抜粋である。浄土三部経とは、『仏説無量寿経』二巻、『仏説観無量寿経』一巻、『仏説阿弥陀経』一巻の、三つの経典をいう。

『無量寿経』上巻本文

（これらの）一切の大聖は、神通にすでに達せり。（このうち）その名を、尊者了本際、尊者正願、尊者正語、尊者大号、尊者仁賢、（略）尊者仁性、尊者嘉楽、尊者善来、尊者羅云、尊者阿難という。

たとい、われ仏となるをえんとき、国中の人・天、宿命（通）を識らず、下、百千億那由他の諸劫の事を知らざるに至らば、正覚を取らじ。

たとい、われ仏となるをえんとき、国中の人・天、天眼を得ず、下、百千億那由他の諸仏の国を見ざるに至らば、正覚を取らじ。

たとい、われ仏となるをえんとき、国中の人・天、天耳を得ず、下、百千億那由他の諸仏の所説を聞きて、ことごとく受持せざる

に至らば、正覚を取らじ。

たとい、われ仏となるをえんとき、国中の人・天、他心を見るの智を得ず、下、百千億那由他の諸仏の国中の、衆生の心念を知らざるに至らば、正覚を取らじ。

たとい、われ仏となるをえんとき、国中の人・天の（用いる）一切の万物、厳浄光麗にして、（その）形色、殊特にして、窮微極妙なること、よく称量することなけん。（しかるに）そのもろもろの衆生、ないし、天眼を逮得して、よく明了に、その名数を弁うることあらば、正覚を取らじ。

『夢十夜』「第三夜」の先行研究においては、「小僧」による予知や心内の先取りを中心として論じられて来た。しかし、「小僧」の有する複合的な能力については、さほど深くは追求されて来なかった。ここで、『無量寿経』と、「小僧」の有する能力との関連において新たな解釈を試みる。

さて、「小僧」の有する能力とは、どう解釈することが出来るのだろうか。順を追って考察することにしたい。

『夢十夜』「第三夜」における、「小僧」の有する複合的な能力を要約すると、

（一）「御父さん」と「おれ」の「百年前」、即ち、過去世を知っている。

（二）「盲目」であるにも拘わらず、「石」や「杉の根」が見える。

（三）「鷺」の「声」を聞き分けることが出来る。

（四）「御父さん」が心の中で考えていることを知っている。

となる。整理すると、

・宿命智→（一）「御父さん」と「おれ」の「百年前」、即ち、過去世を知っている。

・天眼智→（二）「盲目」であるにも拘わらず、「石」や「杉の根」が見える。

・天耳智→（三）「鷺」の「声」を聞き分けることが出来る。

・他心智→（四）「御父さん」が心の中で考えていることを知っている。

となる。

即ち、『無量寿経』本文の、天眼通・天耳通・他心通・宿命通の四種の神通力は、「第三夜」における、「小僧」の有する複合的な能力に該当すると考えられる。

四、「お十夜」と俳句

『日本大歳時記』[12]の「十夜」の【解説】に拠ると、

浄土宗の寺々で行う十日十夜の念仏法要。陰暦十月五日から十四日まで、無量寿経の教えに基いて、誦経し念仏を修する法要である。永享年間に、平貞国が京都の真如堂で十日十夜の参籠念仏を修したるより始まると伝えられている。（略）

とされている。数多ある「十夜」の俳句の中で、正岡子規と高浜虚子の、「十夜」を詠んだ俳句に注目したい。左記は、『正岡子規全集』[13]か

らの抜粋である。

正岡子規　俳句全集　寒山落木　巻二（明治二六年）

十　夜　　薪わりも甥の僧もつ十夜哉
　　澁色の袈裟きた僧の十夜哉
　　牛も念佛聞くや十夜の戻り道
　　鬼婆々の角を折たる十夜哉
　　鄙人のかしこ過ぎたる十夜哉

←

正岡子規　俳句全集　寒山落木　巻四（明治二八年）

大三十日　　漱石虚子來る
　　漱石が來て虚子が來て大三十日（おおみそか）
　　漱石來るべき約あり
　　梅活けて君待つ菴（いお）の大三十日
　　漱石東京へ來りしに

寒　さ　　足柄はさぞ寒かつたでござんせう

十　夜　　旅僧のとまり合せて十夜哉
　　月影や外は十夜の人通り

巨　燵　　漱石來る
　　何はなくとこたつ一つを參らせん

←

正岡子規　俳句全集　寒山落木　巻五（明治二九年）

十　夜　　野の道や十夜戻りの小提灯

左記は、『定本　高濱虚子全集』[14]に拠る。

高濱虚子　　『虚子句集』（植竹書院）

信心の涙も氷る十夜かな
　　信心の涙も氷る十夜かな　　「自選類題虚子句集」

門前に知る人もある十夜かな　　『稿本虚子句集』

門前に知る人もある十夜かな　　新聞「日本」明三二・二・五

門前に知る僧のある十夜かな　　『虚子京遊句録』

其他、明治三一年中の俳句。

管見によれば、正岡子規は、「十夜」の俳句を、明治二六年と、明治二八年と、明治二九年に詠んでいる。更に、高浜虚子が明治三一年に詠んだ、「十夜」の俳句を、「日本」俳句抄に、子規選として掲載している。

なお、子規は、『漱石と子規　―松山・東京　友情の足跡―』[15]に拠ると、

明治一八年九月八日　　柳原極堂・秋山真之らと鎌倉へ無銭旅行。
明治二一年八月　　鎌倉江の島への小旅行。
明治二六年三月二五日　　保養中の陸羯南を訪ねるため、鎌倉に旅行。

と、鎌倉に旅行している。

また、『虚子京遊句録』[16]には、

眞如堂

眞如堂に知る僧のある十夜かな　明　三七

と記されている。このことから、「門前に知る人もある十夜かな」の句は、京都の真如堂が俳句の詠まれた場所であることが判る。

この一見して、異質な、『夢十夜』という題名は、鎌倉の光明寺や、京都の真如堂の、「お十夜」からヒントを得たのではないだろうか。

正岡子規や高浜虚子が、初冬の季語である、「十夜」の俳句を詠んでいることも、興味深い。

（なお、『夢十夜』の本文、俳句、注解、日記は、『漱石全集』（岩波書店、一九九三［平成五］年一二月～一九九九［平成一一］年三月）に拠る。）

注

（1）『現代日本小説大系』第十六巻解説（河出書房版、一九四九［昭二四］年五月）四一七頁。

（2）荒正人「漱石の暗い部分」（「近代文学」第八巻第一二号、一九五三［昭二八］年一二月）四八頁。

（3）相原和邦「『夢十夜』試論―第三夜の背景―」（「日本近代文学」第一三集、一九七六［昭五一］年一〇月）一〇二頁。

（4）笹淵友一「『夢十夜』論―第二夜・第三夜―」（「学苑」第五二四号、一九八三［昭五八］年八月）一一頁。

（5）江藤淳『漱石とその時代（第四部）』（新潮社、一九九六［平八］年一〇月）一六三頁。

（6）荒正人『増補改訂　漱石研究年表』（集英社、一九八四［昭五九］年六月）。

（7）明治三〇年七月四日。『漱石全集　第一七巻』（岩波書店、一九九六［平八］年一月）二二六頁。

（8）前掲（2）、二二九頁。

（9）前掲（2）、二二八頁。

（10）『浄土宗　大本山　天照山蓮華院　光明寺』に拠る。

（11）『浄土三部経（上）（全2冊）ワイド版　岩波文庫　73』（岩波書店、二〇一〇［平二二］年六月）。

（12）『講談社版　カラー図説　日本大歳時記 座右版』（講談社、一九八三［昭五八］年一一月）。

（13）『正岡子規全集　第一巻』（改造社、一九三一［昭六］年一一月發行）と、『正岡子規全集　第二巻』（改造社、一九三二［昭七］年四月發行）。

（14）『定本　高濱虚子全集　第一巻　俳句集（一）』（毎日新聞社、一九七四［昭四九］年一二月）。

（15）『新宿区立漱石山房記念館開館記念特別展　漱石と子規　―松山・東京　友情の足跡―』（新宿区立新宿歴史博物館、二〇一七［平二九］年九月）。

（16）高濱虚子　著　中田余瓶　編『虚子京遊句録』（富書店、一九四八［昭二三］年四月）一一八頁。

【図版出典】

写真1は、木村彦三郎『続鎌倉記憶帖』（鎌倉郷土資料研究会、一九九四［平六］年一二月）より転載。

付記

快く、ご回答をいただいた、光明寺の方々に厚くお礼申し上げます。

（なかむら　けいこ　佛教大学総合研究所特別研究員）